

天王寺こども園評価スケール振り返り

2025.7.4 13:30~15:00

姉妹園参加者：なかはらこども園佐々井先生、上崎先生、小松先生
エールこども園三宅先生、宮先生

外部評価者： 高槻双葉幼稚園園長 岡部祐輝先生
こでまりこども園統括園長 坂本太郎先生

実施園：内藤、下地、権野、別頭、竹森、松浦、岡部、若松、藤本、徳畑

5. 子どもに関係する展示に関する合意内容 **合意点 7**

1. 展示の目的と子どもの反応

- ・ 権野先生（保育士）が、子どもが興味を持つような方法で展示を活用している様子が観察された。
- ・ 例：動画を指差して呼びかけるなど、言葉を使わずにコミュニケーションを促す工夫。
- ・ 子どもが展示に対して自然に反応し、対話が生まれている場面が見られた。

2. 展示物の内容と工夫

- ・ セタの教材を使った展示が行われていた。
- ・ 子どもたちが自分で作った飾りを展示に加えるなど、参加型の工夫がされていた。
- ・ 一部、展示の内容や表現に違和感を持った先生もいたようで、改善の余地があるとの指摘。

3. 先生間の合意形成と対話

- ・ 展示に関して、先生同士で話し合いが行われているかどうか不明瞭。
- ・ 「話し合い」と「共有」の定義が人によって異なる可能性がある。
- ・ 一部の先生は展示に関して「失敗している」と感じているが、それが共有されているかは不明。

4. 子どもの発達との関連

- ・ 3歳児が議論や対話に興味を持ち始めているという観察があり、展示がその発達段階に合っているかが重要。
- ・ 展示が子どもの想像力や言語発達を促すような構成になっているかがポイント。

今後の検討ポイント

- 展示の内容が子どもの発達段階に合っているか、先生間での共通理解を深める。
- 子どもの反応を観察し、展示の改善に活かす。
- 教材や展示物の安全性や適切さ（例：コピーや動画の使用）についても確認。
- 展示に関する先生間の対話や合意形成の場を設ける。

11.「安全」に関する合意内容 **合意点 4**

1. 子どもの安全に関する具体的な事例

- マグネットを口に入れる行動が複数回観察された。
 - 3歳児が口に入れてしまう可能性がある形状・大きさの物品が使用されていた。
 - オレンジ帽子の女の子が口に入れた場面を見て、保育士が追いかけて対応。
 - 他の子どもも「前にもやっていた」と発言しており、繰り返しの行動である可能性。

2. 先生方の対応と共有

- 保育士間での情報共有が不十分だった可能性がある。
- 危険行動の発見時に、すぐに対応・記録・共有する体制の強化が必要。

3. 教材・展示物の安全性の見直し

- マグネットなどの小さな部品は、誤飲の危険があるため再検討が必要。
- 長細い形状のものも、口に入れやすく危険性がある。
- 「舐めていた」などの行動も観察されており、衛生面でも懸念。

4. 今後の対応と提案

- 危険につながる可能性のある物品は、展示や活動から除外するか、安全対策を講じる。
- 保育士間での安全に関する情報共有を強化。
- 子どもの行動を観察し、繰り返し起こる場合は早期に対応・改善。

12.語彙の拡大に関する合意内容 合意点 7

1. 語彙拡大の取り組みと観察

- セタの笹に関する話題で、子どもに「ふさふさしてる」などの擬音語を使って説明する場面が観察された。
- 駅名やドーナツの名前など、文字や言葉を指差しながら子どもと対話する様子が複数のコーナーで見られた。
- パズルやブロック遊びの中で、先生が「三角」「デニム」などの言葉を使って子どもと会話し、語彙を引き出していた。

2. 先生方の意見と確認

- 一部の先生は、語彙拡大の場面を見逃してしまった可能性があるという報告。
- 他の先生が見た場면을共有することで、取り組みの全体像を把握しようとしている。
- 語彙の拡大が「概念の広がり」や「知識の定着」に繋がっていると評価する声もあり。

3. 語彙拡大の工夫と評価

- 日常の活動（例：牛乳とパンの話）を通じて、言葉の意味や使い方を広げる工夫がされていた。
- 一部の活動では語彙の種類が少なく、評価に迷ったという意見もあり。
- 保育者が積極的に言葉を使って子どもと関わる姿が評価されている。

今後の検討ポイント

- 語彙拡大の取り組みを見逃さないよう、観察のタイミングや視点を共有する。
- 活動ごとに語彙の種類や使い方を記録し、評価基準を明確にする。
- 保育者が意識的に語彙を広げる関わりを継続・強化する。
- 子どもが自発的に言葉を使う場面を増やす工夫（例：名前のある物を使う、質問を投げかけるなど）

16.印刷文字に親しむ環境に関する合意内容 合意点 7

1. 子どもが文字に触れる場面の観察

- 制作活動の中で、子どもが「ママの髪の毛」などの言葉を使いながら、絵や作品に意味を持たせていた。

- ・ 机上遊びの壁面にある文字やシートを使って、子どもがレゴで形を作りながら「今どんな形?」「色がいいね」などの言葉を交わしていた。
- ・ 駅名やドーナツの名前など、文字が書かれたものを指差しながら先生と子どもが会話していた場面も確認された。

2. 先生方の意見と確認

- ・ 一部の先生は観察できなかった場面があり、チェックを入れられなかった。
- ・ 「クレジットカード」という言葉が出てきた場面では、子どもにとって馴染みがあるかどうかの判断が難しかったが、先生が「大事なもの」として説明していた。
- ・ のりの種類の違い（乾きやすさなど）についても、言葉を使って丁寧に説明していた場面が評価された。

3. 文字との関わりの工夫

- ・ 子どもが自然に文字に触れられるよう、制作物や遊びの中に文字を取り入れている。
- ・ 先生が言葉の意味や使い方を丁寧に説明することで、子どもが文字や語彙に親しむ機会を増やしている。

今後の検討ポイント

- ・ 文字に親しむ環境をさらに広げるために、遊びや制作に文字を取り入れる工夫を継続。
- ・ 子どもが使う言葉の意味や背景を丁寧に説明することで、理解を深める。
- ・ 観察のタイミングや視点を共有し、見逃しを減らす。
- ・ 子どもが自発的に文字に興味を持つような環境づくり（例：名前カード、ラベル、絵本など）

20.積み木に関する環境と合意内容 合意点 7

1. 積み木の量と遊びの質

- ・ 坂本先生から「積み木の量が十分ではない」との指摘あり。
- ・ ダイナミックな遊びを展開するには、現在の量では物足りない。
- ・ 子ども的人数に対して、理想的には3倍程度の量が必要との意見。
- ・ 子どもが積み木を使って遊ぶ中で、「もっと積みたい」「足りない」と感じる場面があった。

2. 積み木の補充と自由度

- ・ 奥の部屋に積み木があり、そこから持ってくるのが可能であれば、量的には足りていた可能性も。
- ・ ただし、先生の許可が必要な場合は自由に使えず、実質的に制限がある。
- ・ 子どもが自由に必要な積み木を取りに行ける環境であれば、遊びの幅が広がる。

3. 遊びの展開と工夫

- ・ 積み木遊びの中で、子どもが創造的な活動をしていた様子も確認されている。
- ・ 例：枕を使った遊び、積み木を使った構造物の制作など。
- ・ 遊びの中で「言葉のやり取り」や「協働」が生まれている場面もあり、積み木がコミュニケーションの媒介になっている。

4. 今後の検討ポイント

- ・ 積み木の量を見直し、子どもが十分に遊び込める環境を整える。
- ・ 積み木の配置やアクセス方法（自由に取れるかどうか）を再検討。
- ・ 遊びの質を高めるために、積み木の種類やサイズのバリエーションも検討。
- ・ 子どもの遊びの様子を継続的に観察し、必要に応じて環境を調整。

次に向けた提案

- ・ 積み木の量の基準をクラスごとに設定し、定期的に見直す。
- ・ 自由に使える積み木の場所を明確にし、子どもが自発的に取りに行けるようにする。
- ・ 遊びの記録（写真・動画・メモ）を活用して、どのような遊びが展開されているかを共有。
- ・ 先生間の情報共有を強化し、積み木遊びの環境づくりに一貫性を持たせる。

23.遊びの中の算数に関する合意内容 **合意点 5**

1. 算数的要素が見られた活動の例

- ・ 順番・数の認識
 - ・ 電車をつなげて「何両目？」など順番を数える遊び。
 - ・ 数字の磁石やレジのおもちゃを使って、数や金額を意識する場面。
- ・ 大きさ・高さの比較
 - ・ カブラの積み上げと高さの記録（センチ表示）を使った比較。
 - ・ メジャーを使って構造物の高さを測る活動。
 - ・ 天秤を使って重さの比較をする遊び。

• 形の認識と分類

- 積み木の形ごとの分類。
- 数字やアルファベットの磁石の形に触れる。
- 幾何学的な形を使った片ハメパズルなど。

• 数量の把握と分類

- ボードゲームやトランプ遊びで数を数える。
- 材料を「何個使ったか」などで分類・比較する活動。

2. 先生方の観察と意見

- 一部の先生は算数的な要素を見逃してしまった可能性があり、チェックが入っていない。
- 算数的な活動が「先生主導」になっていて、子どもが主体的に関わっていない場面もあった。
- 算数的な要素が見られる活動が「一部の保育室や先生に偏っている」との指摘もあり。

3. 算数的活動の評価と課題

- 算数的な活動が自然に遊びの中に組み込まれている場面は評価されている。
- 一方で、先生が一人で進めてしまっている場面では、子どもとの対話や関わりが不足していると感じられる。
- 算数的な活動の「見える化」や「共有」が不足しているため、他の先生が気づきにくいという課題も。

今後の検討ポイント

- 算数的な要素を意識的に取り入れた遊びの環境づくり。
- 子どもが主体的に数や形、大きさに関心を持てるような声かけや素材の工夫。
- 算数的活動の記録（写真・メモなど）を共有し、保育者間での理解を深める。
- 算数の要素が含まれる遊びを「先生主導」ではなく「子ども主体」で展開できるようにする。

24.遊びの中の算数に関する合意内容 **合意点 7**

1. 算数的なやり取りの具体例

- 数の理解と計算

- 子どもが「15 人いて 2 人休みだから 13 人」と自分で計算して説明する場面。
- 活動終了時に「今日は何人来てる？」と先生が問いかけ、子どもが数える場面。
- ドーナツの値段を足し算して「合計いくらになる？」と考えるやり取り。
- **順番・比較・分類**
 - 遊びの中で「順番」や「どっちが多い？」などの発言が自然に出てくる。
 - 対戦ゲームや机上遊びの中で、順番や数の比較が行われていた可能性あり。
- **形や大きさの認識**
 - 材料の形やサイズを比較する活動。
 - レシピカードやボードゲームの中で、数や順序に関するやり取りが見られた。

2. 先生方の観察と課題

- 一部の先生は活動の中で算数的な要素を見つけられなかったが、他の先生の観察からその存在が確認された。
- 算数的な活動が「自然な会話の中」で行われているため、記録が難しいという声も。
- 算数の要素が「先生主導」ではなく、子ども自身の気づきや発言から生まれている場面が評価されている。

3. 今後の方向性と合意

- 算数的な活動は「伸びしろがある」分野であり、今後さらに意識的に取り入れていく必要がある。
- 来年度に向けて、算数的な要素をより明確に観察・記録できるようにする。
- 子どもが自発的に数や順序、大きさなどに関心を持てるような環境づくりを進める。

次に向けた提案

- **算数的活動の記録方法の工夫**：写真・動画・メモなどで、自然なやり取りを記録しやすくする。
- **保育者間の情報共有**：見逃した場面を補えるよう、観察内容を共有する仕組みづくり。
- **算数的な環境の整備**：数や形、大きさに関する素材や表示を遊びの中に取り入れる。
- **子ども主体の活動の促進**：問いかけや対話を通じて、子どもが自ら考える場面を増やす。

30.保育者と子どものやりとり 合意点 7

31.子ども同士のやりとり 合意点 7

1.トラブルと感情のやりとり

- ・ 企業遊びの中で、ある子が「ままごとに行きたくない」と言った場面があり、先生はその気持ちを受け止めようとしたが、十分に伝わっていなかった可能性がある。
- ・ トラブル後に戻ってきても、気持ちが整理できていない様子が見られた。
- ・ 子どもの「嫌だった」という感情をしっかり受け止めることの重要性が共有された。

2. 関係性の中でのやりとりと成長

- ・ 遊びの中でぶつかってしまった場面では、先生が「直して」と声をかけ、子どもが理解しようとする姿が見られた。
- ・ 仲の良い子同士でも、トラブルが起きた後に再び関係を築こうとする様子が観察された。
- ・ 喧嘩の後に手をつないで戻ってくるなど、子ども同士の関係性の深さが感じられる場面も。

3. 先生方の振り返りと気づき

- ・ 子どもの感情や関係性に対して、先生がどのように関わるかが大きな影響を与える。
- ・ 一部の先生は「見逃してしまったかもしれない」と振り返り、今後の対応に活かそうとしている。
- ・ 子どもの個人性を尊重しながら、集団の中での関係性を育むことの難しさや大切さが共有された。

今後の検討ポイント

- ・ 子どもの気持ちを丁寧に受け止める姿勢を保育者全体で共有する。
- ・ トラブルや葛藤の場면을「成長の機会」として捉え、支援の方法を工夫する。
- ・ 子ども同士の関係性の変化を記録・共有し、保育の質向上に活かす。
- ・ 保育者間での振り返りの時間を設け、対応の一貫性を保つ。

5 歳児の個人性・感情・関わりに関する合意内容（要約）

1. 子どもの感情への共感と対応

- トラブル時にはまず子どもの気持ちに共感することが大切。
- 「なんでそんなことしたの？」ではなく、「どうしたかったの？」と気持ちの背景に寄り添う問いかけが有効。
- 子どもが落ち着くまで時間を置く、静かな場所に移動するなどの工夫も取り入れられている。

2. 言葉の育ちと感情の表現

- 「嫌」という言葉の中にある「悔しい」「悲しい」「寂しい」などの具体的な感情を引き出す支援が必要。
- 子ども同士の間わりの中で、言葉を通じた自己表現が育っている。
- 子どもが自分の気持ちを言葉にできるようになると、トラブルの質も変化してくる。

3. ポジティブな行動への注目

- トラブル時だけでなく、日常の中の良い行動にも注目し、言葉で認めることが大切。
- 「できたね」「我慢できたね」など、小さな成功体験を積み重ねる声かけが効果的。

4. 保育者の関わり方の工夫

- 応用行動分析（ABA）の視点から、「望ましい行動を強化する」関わりが有効。
- トラブル時に構いすぎると、注目を得るために問題行動が増える可能性があるため、関わりのバランスが重要。
- 「クールダウンスペース」や「気持ちを整理する場所」の活用も有効な手段として挙げられた。

5. 子ども同士の力を活かす

- 子ども同士の話し合いや、子どもから子どもへの言葉が大きな影響力を持つ。
- 内容によっては、子どもを巻き込んだ対話や解決の場を設けることも有効。

今後の検討ポイント

- 感情の言語化を支援するための**環境づくり（絵カード、感情表など）**の導入。
- トラブル時の対応マニュアルではなく、柔軟な対応の共有と振り返りの場を設ける。
- 子どもが安心して気持ちを表現できるような信頼関係の構築を継続。
- 保育者自身の感情の整理や振り返りの時間も大切にする。

異年齢保育・個別支援に関する実践と気づき（要約）

1. 三歳児の理解と支援の難しさ

- 三歳児はまだ言葉や感情の整理が難しく、一斉活動への参加が難しい子も多い。
- そのため、個別対応で丁寧に伝えることの積み重ねが、やがて一斉活動への参加につながるという実感が共有された。
- 視覚的な支援（例：カード、イラスト、スケジュール提示）を活用することで、理解が深まる。

2. 保育者の関わり方の工夫

- 子どもに合わせて言葉のかけ方や距離感を調整する。
- 子どもが「教えてほしい」と言える関係性を築くことが大切。
- 子どもが「今は自分でやりたい」と思っている時には、無理に介入せず見守る姿勢も重要。

3. 異年齢の関わりの価値と課題

- 年上の子が年下の子に自然に関わる姿が多く見られ、「憧れ」や「真似したい」という気持ちが育っている。
- 年下の子が年上の子に助けられるだけでなく、年上の子が年下から学ぶ場面もある。
- 一方で、異年齢保育に対する保護者の不安や誤解もあり、丁寧な説明と共有が必要。

4. 関係性の流動性と社会性の育ち

- 援助する側・される側が固定化されず、入れ替わる関係性が大切。
- 子ども同士の関係性が変化する中で、社会性や共感性が育まれていく。
- 異年齢の関わりは、「教える・教わる」だけでなく、「共に育ち合う」関係を築く土台になる。

今後の検討ポイント

- 三歳児への支援では、視覚的・具体的な伝え方を工夫し、理解を助ける。
- 異年齢保育の中で起こるトラブルは、個人の課題として丁寧に対応し、制度や年齢のせいにはしない。
- 子ども同士の関わりを記録・振り返り、保育者間で共有することで、支援の質を高める。
- 保護者への説明や共有を通じて、異年齢保育の価値を伝える機会を増やす。

保育の振り返り：算数的活動と文化づくり

1. 算数的活動の選択と意義

- あえて「算数」というテーマを選んだことに対して、保育者自身が苦手意識を持つ領域に挑戦した姿勢が評価された。
- 「重い・軽い」「大きい・小さい」「数える」などの感覚は、実体験を通してしか身につかない。
- AIやITが進化する中で、人間の感覚や経験に基づく学びの価値が再認識された。

2. 数字の持つ意味と記録の力

- 数字は「嘘をつかない」ものであり、保育の中での評価や記録においても、客観性と積み重ねの証となる。
- 点数やスケールを通じて、保育者の思いや体験が「見える化」され、振り返りの質が高まった。

3. 文化としての保育の継続性

- 今回の取り組みは、単発ではなく「文化」として継続していくことが重要。
- 全てを一度にやるのではなく、優先順位をつけて、自分たちが夢中になれることを選び取る姿勢が大切。
- 保育者自身が「面白い」「やってみたい」と思えることが、子どもたちの学びにもつながる。

4. 異年齢保育と関係性の流動性

- 年齢を超えた関わりの中で、憧れ・学び・援助の関係が自然に育まれる。
- 援助する側・される側が固定化されず、入れ替わる関係性の中で社会性が育つ。
- 保護者への説明や理解の促進も、異年齢保育の価値を伝える上で重要。

グループ活動・算数的遊び・環境調整に関する振り返り

1. グループ活動の初挑戦と工夫

- 年齢差のある中で、グループ分けやトピック選定に悩みながらも、子ども同士の対話を重視して進めた。
- 子どもたちが「聞く」「話す」「考える」ことを通じて、協働的な学びの姿が見られた。

2. 環境の調整と影響

- 机の高さやスペースの使い方が、子どもの集中力や活動の質に影響することを実感。
- 環境の細かな調整が、子どもたちの主体的な活動を支える鍵であると再認識された。

3. 算数的活動の選択と挑戦

- あえて「水害しそうな項目」にチャレンジすることで、保育者自身の学びと成長につながった。
- 子どもたちが「量」「高さ」「数」などを実体験を通じて理解する姿が見られ、算数的な感覚の育ちが確認された。

4. 保育の積み重ねと文化づくり

- 今回の取り組みは、これまでの保育の積み重ねが形になったものであり、今後の継続と文化としての定着が期待される。
- 全てを一度にやるのではなく、優先順位をつけて、自分たちが夢中になれることを選び取る姿勢が大切。

今後の展望

- 子どもたちの姿を丁寧に見取りながら、環境・活動・関わり方を柔軟に調整していく。
- 保育者同士の対話を通じて、実践の意味や価値を共有し、文化として育てていく。
- 子どもたちの「気づき」や「発見」を大切にしながら、算数的な感覚や論理的思考の芽を育てる。

実践の振り返り：スケール評価と継続への意識

1. スケール評価への緊張と挑戦

- スケール評価は毎回緊張感が伴うが、今回は特に**「苦手な領域」に挑戦する意識が強かった**。
- 評価項目の選定や、何を提示するかについて、チーム内で多くの議論と葛藤があった。

2. 単発で終わらせない保育の継続性

- これまでの実践では、活動が「単発で終わってしまう」ことが多かった。
- 今回はその課題を乗り越え、継続的に取り組める保育の形を模索した。

3. 苦手なコーナーへの挑戦と学び

- あえて苦手なコーナーを選び、他の先生方からのアドバイスを受けて改善を図った。
- その過程で、保育者自身が多くの学びを得ることができた。

4. 今後への展望

- 今回の取り組みを「検証しながら継続していく」ことが目標。
- スケール評価を通じて得た気づきを、日々の保育に活かし、文化として根付かせていきたい。

1. グループ活動と準備の工夫

- スケール評価に向けて、グループでの話し合いや準備を重ねた。
- 年齢差のあるグループでの活動に悩みながらも、協力して進めた。
- 緊張感の中でも、子どもたちの姿を見て学びがあった。

2. 感情的な反応と学びの気づき

- 緊張や不安を感じながらも、実践を通して自分自身の成長を実感。
- 子どもたちの反応や先生方の助言から多くの気づきを得た。

3. 環境調整の重要性

- 机の高さやスペースの使い方など、環境が子どもの集中や活動に影響することを実感。

- ・子どもたちの様子を見ながら、環境を柔軟に調整することの大切さを再確認。

4. 協働的な学びと支援の姿勢

- ・職員同士の連携や助け合いが、保育の質を高める鍵となった。
- ・子どもたちの声を聞きながら、支援の方法を工夫していく姿勢が育まれた。

5. 今後の目標と継続への意欲

- ・今回の取り組みを一過性のものにせず、継続していくことが目標。
- ・保育者自身が夢中になれるテーマを見つけ、文化として根付かせていきたいという意欲が示された。

姉妹園の先生方による振り返りまとめ

教師と子どもの関わり

- ・先生が子どもと一緒に遊んで遊ぶ姿が多く見られた。
- ・ままごとコーナーでは、先生がなりきって遊ぶことで子どもたちの遊びが広がっていた。
- ・制作コーナーでも、先生が子どもと一緒に作る姿が印象的で、子どもとの距離が近かった。

感情的な関与と気づき

- ・先生自身が楽しむことの大切さを再認識した。
- ・保育を詰めすぎることで子どもとの関わりが制限されることへの気づきがあった。
- ・保育者が楽しむことで、子どもも自然と楽しめる環境が生まれるという実感が得られた。

協働的な学びと支援の姿勢

- ・先生同士が話し合い、悩みながら準備を進めた過程が保育の質向上につながった。
- ・コーナーの設定や環境づくりにおいて、協力し合う姿勢が見られた。
- ・子どもたちの興味に合わせたコーナーづくりを意識し、柔軟に対応していた。

今後の目標と継続への意欲

- ・今回の取り組みを一過性のものにせず、継続していきたいという意欲が示された。
- ・先生たちのアドバイスを受けながら、より良い環境づくりを目指していきたい。
- ・保育者自身が楽しみながら、子どもたちと共に成長していく姿勢を大切にしたい。

外部評価者による振り返りまとめ

1. 専門的な観察

- ・異年齢保育の実践において、発達段階に応じた環境設定の難しさが指摘された。
- ・保育者が情緒面だけでなく、発達面にも注目することの重要性が強調された。
- ・おもちゃや教材の配置において、子どもの発達を促す意図が必要であるとされた。

2. 発達の視点

- ・三歳から五歳までの発達を保証する環境づくりの難しさが共有された。
- ・おもちゃの選定において、年齢に応じた発達の段階を意識する必要がある。
- ・語彙の拡大や概念理解に関して、子どもの言葉の使い方や推論力が評価された。

3. 保育者と子どもの関わり

- ・保育者が楽しんで活動に参加することで、子どもたちの遊びが豊かに展開していた。
- ・ごっこ遊びにおいて、保育者が役になりきる姿が子どもたちの反応を引き出していた。
- ・保育者の言葉かけやユーモアが、子どもとの関係性を深める要素として機能していた。

4. 今後への提案

- ・保育環境の検証には、保育者自身が子どもと一緒に遊び、体験することが有効である。
- ・活動の狙いや発達への効果を明確にし、保育の専門性を高めることが求められる。
- ・保育者が楽しむ姿勢を持ち続けることで、子どもたちの主体的な学びが促進される。
- ・今後も園同士の情報交換や協力を通じて、保育の質向上を目指していくことが期待される。